

へき地小規模校の児童の主張性向上プロジェクト

宮城県東和町立嵯峨立小学校 6年担任 小松 英明

hideaki@hide-family.net

キーワード：交流学習，ネットワーク，テレビ会議システム，コミュニケーション能力

1. はじめに

高度情報通信社会の進展に対応して、学校教育において小学校・中学校・高等学校を見通した情報教育の必要性が指摘されている。とりわけ小学校では、受け手の状況などをふまえて情報を発信・伝達できる児童の育成を目指して、情報を一方的に発信するのではなく、相手の立場に立っての情報発信ができるコミュニケーション能力の育成が求められている。

本校は、宮城県の北部に位置するへき地小規模校である。従来、へき地小規模校の児童の一般的な特性として「内向的である」「言葉による表現力が不足している」などの特性が指摘されてきた（国立教育研究所 1988，三好 1977）。また、質問紙を用いた調査によって、他人を意識したコミュニケーションに関して大規模学校群の因子得点が小規模学校群の因子得点より有意に高いことが報告されている（小松 1999）。

情報教育で求められている相手の状況をふまえて情報を発信・伝達できる能力をへき地小規模校の児童にもつけさせたいという思いが本プロジェクトのはじまりである。

2. 教師の支援と児童の変容

2.1 基本的な考え方及び手だて

前出の国立教育研究所の研究(1988)では、へき地小規模校の児童の特性には、対人関係の広がりや形成される集団の小ささが影響していると指摘されている。そこで、本研究では児童の主張性（コミュニケーション能力）の向上を図るため、対人関係を広げ形成される集団を大きくする試みや対人的なコミュニケーションの場を多く設けること等を主な取り組みとした。

(1) 富山県氷見市立海峰小学校との交流

富山県氷見市立海峰小学校 6年生との交流は、昨年の5月から始まった。交流の中心は、テレビ会議システムを利用した交流で、その間にメール交換を行うという交流であった。

(2) 主張性訓練

話をするスキルの向上を意図して、主張性訓練も行った。定期的には実施できなかったが、朝の会の時間を利用して訓練を行った。

(3) 外部の方との交流

総合的な学習の時間で「将来就きたい夢の職業調べ」を行った。その中で、将来就きたい職業に就いている方々へE-mailなどを利用しての取材を行った。また、町内の小学校5校が一緒に行った修学旅行での他校の児童との交流や夏休みを利用しての同世代の児童たちが参加するキャンプへの参加などを行った。



図1 嵯峨立神楽を舞う児童

2.2 児童の変容

(1) 富山県氷見市立海峰小学校との交流

テレビ会議システムというメディアに対する新規性もあり、非常に意欲的だった。1回目のテレビ会議では、お互いの学校を紹介することとなり、当校からは、学区の立地や特産品、そして、地域に古くから伝わっている嵯峨立神楽を舞ってみせるという紹介を行った（図1参照）。海峰小学校からは、学校の立地や氷見市の様子等の紹介をしてもらった。

1回目のテレビ会議を行う準備として、児童たちに何を準備したらいいかを考えさせたところ、「台本を準備した方がいい」ということになった。当校の児童にとって、交流学習は全く初めての経験であり、期待も大きい反面、不安も大きかったのである。そこで、台本を準備し、リハーサルを行った。リハーサルは、ビデオに録画しておき、あとで視聴した。ビデオの視聴は、自分の話す姿を客観的に観察する場となった。ビデオの視聴により、視線をカメラに向けること、表情がこわばらないように気を付けること、自分の話す内容を全く初対面の人でも理解できるようにすることなどに気づくことができた。また、実物を用意した方がいいということになった。当地区では、ダチョウの飼育に取り組んでいるが、ダチョウの卵と剥製を借りて当日に見せることとした。

E スクエア・プロジェクト成果発表会

2 回目の交流は、海峰小学校の児童が椎茸栽培に取り組んでいるが上手に栽培できないということを聞いて、当地区の地場産業が椎茸栽培であることから 椎茸栽培の仕方について説明することとなった。児童は 家族に対して取材を行い、その取材を基に話す内容を決めていった。やはりリハーサルを行いそのビデオを視聴する中で、児童は、「説明するときには、ニュース番組のようにフリップを使った方が分かりやすい」ということに気づくことができた。また、2 回目の交流前後に海峰小学校からはケナフ煎餅や椎茸煎餅が届き、本校からは特産の椎茸を送った。

3 回目の交流は、海峰小学校で作成した学校紹介ビデオを視聴した感想を発表することとなった。国語で、集団発想法である KJ 法について学習した児童は、KJ 法を使って、ビデオに対する意見の集約を行った。意見の集約をするまではチェックできたが、交流の直前になって担任の急な出張と体調不良が重なり事前の台本のチェックは行えない状況になってしまった。事前に海峰小学校へも連絡するタイミングを失い、児童も予定した日に実施したいという意見だったのでテレビ会議を予定通り行った。当校の児童は、自分たちで集約した意見を素直に発表した。しかし、その内容はあまり海峰小学校の作成したビデオを誉める内容ではなかった。むしろ、改善点を挙げる内容だった。児童は、「ビデオを見た感想をしっかりと言わなくちゃ」ということにのみ集中してしまい、意見を聞く立場である海峰小学校の児童の立場に立つことを忘れていたのである。情報活用の実践力と言えば、受け手の状況などをふまえないままに情報発信を行ってしまったのである。テレビ会議後にテレビ会議を録画したビデオを視聴した。その場で、児童たちに「海峰小学校の人は、みんなの意見を聞いてどう思っただろうか？」と問うたところ、児童からは、「相手の立場に立って、話す内容を検討すればよかった。」等の意見が出された。

3 回という数少ないテレビ会議の利用であったが、児童は、1)自分たちの話の仕方を能力としてとらえることができるようになり、2)相手に情報を伝える手段を工夫し、3)相手がどう思うかを考えて情報発信する必要があることに気づくことができた。

(2) 主張性訓練

主張性訓練とは、ジレンマ場面での台本づくりである。例えば、「図書館で、怖い先輩が自分の探したい書架の前で友達と楽しそうに話をしている。自分は、その書架で本を探さなければならないのだが、相手を怒らせずにしっかり自分の欲求を相手に伝えるためには、どのような話の進め方をすべきか」という場面設定での話し方を考えるのである。

はじめは、ふざけながら取り組んでいた児童であったが、海峰小学校との交流などで、話し方にスキルがあるということを実感した頃から取り組みが変化しはじめた。課題の状況設定を真剣に考え、解決する発話方法を考えはじめた。話題の進め方や相手の応答に応じた話し方などについても考えるようになってきた。

(3) 外部の方との交流

総合的な学習の時間で、「将来就きたい夢の職業調べ」を行った。当校のインターネット環境の整備が整い、全ての端末からインターネットに接続できるようになったことから、児童は自分の課題を web で調べようとした。しかし、思い通りに課題に合致する web を探すことができなかった。一方で、電話を使って取材を進めていた児童の様子を見て、児童は E-mail を送って取材する方法を思いつくことができた。E-mail にも順調に返事が来て、子どもたちは課題に応じた取材方法があることとともにネットワークの先に人間がいることを感じることもできた。

同世代の児童などとの交流を通しては、自分たちのコミュニケーションが内向的だったことに気づくことができた。

3. まとめ

へき地小規模校の本校であるため、データ数が少ないことから統計的手法が取れず、教師の観察のみで結果を述べてしまうことが残念だが、児童は着実に力を付けることができた。

コミュニケーション能力の育成を主眼に本プロジェクトを進行してきた。児童が、日常的に行っている話し方にスキルがあり、話し方にも能力があるということを児童が自覚したときに児童の姿勢が大きく変わった。自分から進んでアナウンスの仕方を勉強する講習会などに参加するなど、自分の話す能力を伸ばそうとする姿を感じられるようになってきたのである。

へき地小規模校の児童のコミュニケーション能力を育成するため、本プロジェクトでは、インターネットなどのネットワークを利用した。ネットワークを利用し、擬似的にはあるが対人関係を広げ形成される集団を大きくする試みや対人的なコミュニケーションの場を多く設けることは、へき地小規模校の児童にとって非常に有効であった。

生まれ育つ場所によって、人間関係に制約を受けたり、社会的に制約を受けたりすることは、ネットワーク上の様々な技術革新により、改善する可能性があるのだと言うことを実感させられた 1 年だった。

引用・参考文献

国立教育研究所(1988)『へき地教育の特性に関する総合的研究 児童の教育環境としてのへき地性・小規模性の測定を中心に』

三好京三(1977)『先生も涙ながれたぞ 僻地で教えた 14 年間の記録』, 学陽書房, pp.19-20.

小松英明(1999) 小規模校における児童の主張性に関する研究 上越教育大学大学院修士論文